九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

朱子學の精神

楠本, 正繼

https://doi.org/10.15017/2544984

出版情報：哲學年報. 4, pp.41-64, 1944-03-05. 九州帝国大学法文学部
バージョン：
権利関係：

朱子學の精神

楠本正繼

朱子學の精神

貝原益軒の大疑錄、太田錦城の疑問錄、清の戴東原の孟子字義疏證等、從來名高い朱子學批評（適切には宋學批評）の書に於てはその老莊・釋氏の思想との關係の方面、特に攝取素材の外面的な指摘に止るものが目立つてゐて、此の素材が所謂戈を操つて室に入る手段によつて活用されるに當り（程子歿後、佛教思潮の中に在つて僅に師說を守つてゐた楊亀山はこの手段によるに非れば佛教思想の攻め易からざる所以を言つてゐる。——亀山文集一六與楊仲達書。亀山については朱子は不滿の意を漏してゐるし、亀山と朱子とでは學問組織の力量に格段の差があつたと思はれるから、ここにこの事をあげるのは穩當でないかも知れぬけれども）如何なる指趣によつて導かれたかといふことについては、不思議にも看過され勝ちである。これは朱子學が一般思想教育界の常識となつて、其主要なる資料を衆人が知悉して居た時代、更に進んでは其の固定化によつて弊害を生じて居た時代に於ては眞に意義があつたが、今日のやうに殆ど朱子學を忘れた時代に於ては、この儘では朱子學が嘗て久しく勢力を持つてゐた所以、ひいては我國の思想と接觸して現はれた種々の事象の理解にも缺陷を生ずる懸念もあるから、又最近支那に於ても國步艱難なるに際し、宋學を想起する傾向が起つてゐた事實があり（重刻丘濬世史正綱序、錢穆中國近三百年學術史序、馮友蘭新理學序等參照）この邊から支那の民族性に根差す新思想が發生しまいものでもないから、此の際極めて概略ながら、嚴密に資料に即いて一通り朱子學の精神解釋を試みて置き度い。

一

朱子學は世界を理及び氣の二方面から考へてゐる。理のうち所以然と名付けられるものは事物の根本因をいひ、所謂太極であるといはれるが、朱子は何故に太極といはれるかを說明して「其の究竟至極名づく可きなきが故に、特に之を太極といふ。太極に至つては則ち又初より形象方所の言ふべき無く、ただ此の理の至極を以て之を極といふのみ」と言つた（文集三六答陸子靜書）太極の極はかく至極の極であつて、兼ねて標準の義があるから、それは尙書洪範の皇極の極と同義であるとされる。朱子の皇極辨（文集七二）を見ればこの趣旨が極めて明瞭となる。朱子は此文に於て「皇極」の二字を「大中」と訓じなかつた。これは孔氏傳以下先儒（その中には朱子の思想に深い影響を與へた程子をも含む）の說と違ふのである。朱子は皇極を君（天子）となし「極とは至極の義、標準の名、常に物の中央に在りて四外之を望み以て正を取るなり。故に極を以て中にあるの準的となさば則ち可、而して便ち極を訓じて中となさば則ち可ならず」と言つてゐる（又和版語類九四の五頁參照）これ皇極を訓じて大中となす者が、凡そ事を立つ大中の道を用ゐんと欲して、含洪・寬大・至寬・至廣を主として、含胡・苟且・善惡を分たざるに至つて、至精・至嚴の立場を取らず、遂に優游姑息、是非顚倒し、賢否貿亂して禍敗之に隨ふことを恐れたに外ならない。ここには禪學・陸象山の學・婺州功利の學に對する朱子の態度が表明されてゐる。朱子は皇極の一章を以て洪範九疇の本と考へたが、皇極とは人君其一身を以て至極の標準一箇の表儀を天下に樹て無偏無黨の王道を行ふことをいひ、萬民皆其の表儀に從つて此處に歸一し、天子は民の父母となり、以て天下の王となるのである。此の如きは朱子が千古の惑を一

破す（文集五二答吳伯豐書）と自負した所の思想であつた。嘗てはよく流布した門人蔡九峰の書集傳には此の說が述べられてゐる。老莊も世界の根本を說いてゐるけれども、右の如き考方をしない。朱子學は此點に於て違ふ。併しながら、至極の理を意味する太極は同時にその儘最も包擁的で、すべての物を內に持たなければならない。故に周濂溪の太極圖說は太極といふ字の外に、無極の二字を加へて理を說明すると朱子は言ふ。世界の根本因たる理は實に「無極にして太極」とされなければならない。周濂溪の太極圖說は洪容齋修むる所の宋國史濂溪傳によれば「無極よりして太極となる」とあつたといはれるが（朱子文集七一記濂溪傳、又同三六答陸子靜書）縱ひこれが原文であつたにせよ、朱子學に於ては飽まで太極が直ちに無極でなければ意義が無かつた。卽ちかくして始めて太極圖說の史的價値が生ずる。太極圖說の觀點としてはこの事こそ最も重要なところであつて、朱子は此處の主張に全力を盡したといつても過言でない。されば「無極にして太極」といふ考は、至極の理が更に其の上の絕對者より出づることでなく、そのまま偏倚性を放棄することを求める心である。「無極を言はざれば則ち太極一物に同じうして萬化の根本となるに足らず。太極を言はざれば、無極空寂に淪んで萬化の根となること能はず」（同上答陸子靜書）「無極にして太極」の一句がその語をなす精密微妙なりといはれるのはこのことを外にしては解し難い。かく考へられた理、卽ち所以然は其の働から言へば自らなる性質を有する。所以然は世界を生成するが、それは自ら行はれる。ただ、かかる自らなる働について、之を通じて大いなる目的が完成されるから、所以然は天地の心といはれる（語類一の四頁等）天地の心には元・亨・利・貞の四德があつて元の德が其の運行を統べてゐるので、四時の序をなして春生の氣通ぜざる所がない（文集六七仁說）これを人心の德についていへば仁・義・禮・智、又は代表的にただ仁といふことも出來る（同上中庸或問

嘉點本三頁、文集七六小學題辭等參照）而して仁は決して無差別平等の愛ではなく、家及び國を本とした愛である。莊子人間世篇には親を愛することを運命的なもの、君に事へることを道義的なものとして、この二つの事柄の大法たる所以を說いてゐて、內は則ち君臣、外は則ち父子を人の大倫とする齊の大夫景丑氏の口吻（孟子公孫丑下）と相似てゐるけれども、莊子にとつては父子君臣の關係を成す家及國は結局人間生存の已を得ない傳統形態に過ぎないのであつて、實は消極的關心を以て巧に之に處してゆくのであるが、朱子の場合にはこれが主な基礎であるから、その意義は更に積極的となる。家・國を離れては支那民族が存在の根柢を失ふこととなる所以を察知した所に儒敎徒としての朱子の面目があつた。朱子がしばしば人間世篇の思想を駁し、君臣の關係をば父子と共に飽まで天性とみたのは、かく考へなければ父子と君臣、家と國との間が一貫した鞏固な存在となり得ないからであらう（文集八一跋黃仲本朋友說、同八二跋宋君忠嘉集等參照）殊に朱子は君に對する忠を重んずる傾向が强かつた。純忠を說く韓子拘幽操の意義が認められ、孟子の論が怪差なりとせられた（語類一三の一二頁）朱子に於いては君と國とは相離れない。我國の山崎闇齋が朱子書抄略を編んで、君臣を人倫の首に置いたのは必ずしも朱子の精神を歪曲したと考へられない點がある。一般に儒書は父子を主として語つて、五倫を敎へるが主意ととられる。ただ儒書のうち比較的君臣を重んじたものは朱學關係の書であつたといひ得るであらう。これは同じく積極的に人倫の上に立つ陽明學が（王陽明年譜弘治十五年の條に陽明が愛親の本性から、仙釋二氏の非を悟つたことについて重要な資料がある。陽明學の理解にこの事を逸すれば大きな誤謬に陷る）特に家族中心なる孝弟を重んじたこと（傳習錄卷之中答聶文蔚書等）と考へ合すれば、興味深い問題の糸が辿られて來る（尤も宸濠事件の際に於ける王陽明は大義の爲に立つたのに相違はなく、忠孝兩全

は殊に晩年の念願であつたけれども、其學說の根本義に朱子の如く特に忠を押し樹てるのではないといつてよからう——陽明全書一三、四乞省葬疏等參照）故に仁愛は常に其の分殊を意味する義と相待つて說かれる。同時に、仁は愛以外のものでないから、申・商慘覈の科と違ふことを志れてはならない。斯樣にして朱子學に於ては世界を生するもの、その根本存在たる絕對者が家及び國を本とする人の德、ひいては道德法則と關聯して來るのである。否寧ろ家・國の道德法則が世界を生するもの、その眞の存在として絕對の權威を有するに至る。張橫渠西銘の思想が朱子の重んする所となつたのも、そこでは家・國・宇宙の道が表裏相貼し、森嚴にして且つ情感に滿ちた融合を示してゐるからであらう。

扨て、朱子學に於ては理と共に氣が考へられて世界觀の他の一面を形造つてゐることは先に述べておいた。氣とはほぼ物質的なるものを意味する。而して古來かかるものは之を陰陽に、陰陽は更に之を五行に分け、五行が世界をつくるものと考へられて來た。朱子も此の傳統を承ける。然らば、理と氣とは如何なる關係にあるか。朱子によれば、所以然としての理は世界の根本因であり、非時間的に（この點複雜な問題もあるが）氣即ち陰陽に先ち、氣を生じ、氣によりて存在する。理は陰陽ではなく、又陰陽を離るるのでもなく、陰陽に即いて其の本體を指し、陰陽に雜へずして言ふ（太極圖說解、又語類九四の四頁、同七五の一九頁等參照）併し理氣は決して混融してはならない「陰陽たがひに運るものは氣なり。其の理は則ち所謂道なり」（周易本義繫辭傳、又語類二四の二二頁參照）茲に注意すべきは理氣を分つ所に在る。朱子は明の諸學者（普通、吳蘇原などが擧げられるけれども、この人に限つたことはない）や我國の古學派などと異つて理氣を渾融する傾向を取らない。それは何に因るかといへば、一には理の至高にして偏

黨無き所以、この意味に於ける其の絶對性を維持すること、二には此の世の差別相を看過しないこと、以上が動機となつてゐる。朱子は一者の存在を說くが、同時に決して多者の相を輕視しない人であつた（論敵陸象山、其の系統を繼ぐ王陽明、殊にこれ等とは其の思想の性質がやや違つたものではあるが、邵康節・程明道・楊慈湖等はこの點に於て著しく朱子と違ふ）朱子によれば、氣の差別相は現實を直視するものの必ず見逃してはならないものであり、同時に理は此の雜多なる相に卽いて、絶對者としての尊嚴を保ち、前者は結局に於て後者に歸する。

二

世界觀に於ける理氣分離の考は人間を說くに當つても亦朱子學の特色をなす。朱子によれば、身の主宰たるものを心といひ、心の本體を性、その用を情といふ。而して心は性・情を統べ主る（勿論、それは渾一なるものの中について其の體用を指すのであつて、性と情と懸絶するわけではないから、情を離れて性を考へてもまた誤る）前述の理卽ち所以然は世界を生じ、之によりて存在する。世界を成す所の萬物の心に在り、其の性となる。「性卽理」といふ程子の說は陸王學の「心卽理」といふ考に對して朱子學の固く執る所の見解である。世界の本體としての理は「無極にして太極」といはれたが、心の本體としての性も渾然たる全體――一者がそのまま燦然として條理あるもの――多者なるが故に、空虛の見解をなすことは許されない。卽ち一者としての性――仁は、同時に多者としての性――仁・義・禮・智・（信）であつて、虛空の者あつて後この四つの者を生ずるのでも、虛空の者の裏面に四つの者を包むのでもない（文集七四玉山講義、同六一答林德久書、同五八答陳器之書、語類六の九頁等參照）恰も世界觀に於ける元と

元・亨・利・貞との關係に當る。

又仁が家及び國を本とする上から、仁義の二字で表はされること上述の通りである。朱子は「人の性もと實、而して釋氏性を以て空となすなり」と言つてゐる（語類六の六頁、又同一二六の一一頁、文集五九答陳衛道書、別集八釋氏論等參照、これ等の資料によつて實といひ空といふ事が何を意味するかがはつきり分る）禪を學んでゐた朱子が李延平によつて釋より儒に轉ずるに當つて、何處に力を得たかといへば、仁義の性を識り得て的確なるにあつたことは疑ひ難い（孟子牛山章集註、朱止泉朱子聖學考略提要十頁等參照）右のやうな內容を有する性は發して情となるに及んで、孟子の言ふ如く四端となる。卽ち惻隱・羞惡・辭讓・是非となる（仁が性の代表者である如く、惻隱は情の代表者である）かくて仁・義・禮・智は性、惻隱・羞惡・辭讓・是非は情、仁を以て愛し、義を以て惡み、禮を以て讓り、智を以て知ることを爲すものは心といふ（文集六七元亨利貞說）惻隱以下は情であるが、一般に言へば情は喜怒哀樂等の七情を含み、その內には普通善と稱せられないものもある。これは性については決して考へられぬことであつた（語類五の諸條及び李退溪自省錄、同文集一六答奇明彥非四端七情分理氣辨書參照）以上のやうな考に於て性と情との混合が防がれ、しかも心については虛靈知覺の妙用が說かれてゐる（文集七六中庸章句序、語類五の三頁等）仁は「心の德、愛の理」といふ語（論語學而篇集註）は愛を離絕しては仁の見處が眞實性を缺ぐ（文集三一答張敬夫書參照——語類二〇の一九頁に仁の滋味と言はれるものがこの眞實性であつて、我國に於ては朱子學者もこの點を重要視したらしい。例へば山崎闇齋文會筆錄四之一、大塚退野言仁要錄、宇井默齋未發愛論爭等參照）と同時に愛そのものでは、また直ちに仁と言ひ難いことを意味する。朱子によれば愛は惻隱と同じく情であつて性ではない。父兄を

愛する意の孝弟が仁の本ではなくして、仁を爲すの本であり、仁を爲すの本として意義があるのも同樣な精神から來るものと想像される（論語學而篇集註、語類二〇の一八頁、文集四七答呂子約書等參照、なほこれは論語の孝弟也者其爲仁之本與といふ文句の解釋に關してゐるが、七經孟子考文によれば、我が足利本には爲の字が無いさうである。若しこれが正しいなら、程子を繼承する朱子のこの說は經典に據所を失ふことになる。然しただそれだけのことであつて、今日に於ては、程朱の思想の批評はかかる邊に止つてはならないであらう）朱子はかくて實踐の功夫を顧慮することを忘つてゐないが、また常にそれを支へる根元的なものを考へてゐる。この事は宋學研究上の大切な手懸である。

所以然の理は氣を生じ氣により、人の性となる。朱子が考へた所の理の他の一面、卽ち所當然は此の性に本づく自然法則及び別して人の道であつた（大學或問嘉點本二〇頁、語類四の六頁、同一八の三四頁等參照）自然法則の部分を見落せば朱子學の解釋が狹きに失するやうに思ふ。殊に後述社倉法其他、朱子政事施設の實績の說明が半ば困難になる（淸の康熙帝や我國の佐久間象山などの西洋學攝取の主張は朱子學に於ける自然法則の考方から自ら生じ得る。象山の上書や題一齋先生遺墨の文等參照のこと）併し右の自然法則も實は宇宙の生命・目的に歸してゆく點に於て、結局機械的な自然法則ではなかつた。（又朱子學の歷史的發展の上から見れば、朱子の主とする所は一木一草の間に於ても性命の理を見るにあつたとせねばならない——中庸或問參照、從つて大橋訥庵の闢邪小言のやうに形而上學的な理の解釋こそ朱子學の正しい見方であるといふ論も成立つ）大學の所止、中庸の五達道、孟子の人倫等が朱子の考へた人道のうち最も主要なものであつて、（大學或問嘉點本一三頁、語類一五の一頁、小學題辭、文集七四、白鹿洞書

院揭示、文會筆錄六全集本二八四頁、淺見絅齋聖學圖講義等參照）何れも家と國とを本としてゐる（ただ達道・人倫のうち朋友のみ直接に家と國とに關係が無いが、大學には朋友が國人となつてゐる。朱子は或問にいふ――物有れば則あり。是を以て萬物庶事各當に止るべきの所有らざるなし。ただ居る所の位同じからざれば、止る所の善一ならず故に人の君となつては則ちその當に止るべき所のもの仁にあり。人の臣となつては則ちその當に止るべき所のもの敬にあり。人の子となつては則ちその當に止るべき所のもの孝にあり。人の父となつては則ちその當に止るべきもの慈にあり。國人と交つては則ちその當に止るべき所のもの信にあり。これ皆天理人倫の極致、人の已むべからざるものに發す――而して右或問や語類一六の六頁に注意を與へてゐるやうに、これに夫婦兄弟の道が加はつて大倫の目が備はることとなる）朱子學に於ては所以然にして易ふべからざるものと、所當然にして已むべからるものと相待て始めて理の意味が盡きる。

扨て、性自體は內在せる所以然であり、本然の性と稱せられる。本然の性が氣に內在する範圍に於て制限を受ける之を氣質の性といふ。惟ふに、氣は一なる理卽ち所以然の生ずる所なるにも拘はらず多である。本然の性は氣質の性として差別を生ずる（大學或問三頁及び語類四の諸條參照）それは一個の明珠が水裡に在り、水の淸濁によつて明なると否とに譬へられる（語類四の一九頁）併しながら本然たるものは未だ嘗て失はれない。具體的の性は氣質の性の外あることなし、氣質の性により個性の相違が現はれ、常人の心に分裂の狀態が存する。所謂人心是れ危く、道心是れ微なる事實が存在し、精一執中の功夫が必要となる。朱子はよく現實の人間性の複雜さを知つてゐた（大學或問三頁、文集七四玉山講義等參照）此の點に關しては韓子（愈）揚子（雄）などの性論は固り、荀子性惡論の說く所亦一

理なしとしない（語類四の二四頁、同五九の一四頁）現實の人間性は決して單純素朴なものでなく、人々が十分に其の性質を研め、堅苦の功夫を盡すにあらざれば導き難いものであつて、朱子が「氣强くして理弱し」（語類四の一七頁）と言つたのは寧ろ人間に對し眞摯な觀察をなしてゐたと解すべきであらう（朱子は陰符經の如き書にさへ關心を持つた。此の書は生殺密に相依る天地の間に處して自然の機を失はず、之を制する所以を敎へてゐる。されば我國の朱子學者、例へば淺見絅齋。若林强齋、特に山口春水などが深く孫子を讀んだこと――春水の孫子考は孫子注釋書中の傑作である――は不思議に似て不思議でない。此の人達は、兵の目標は大義なれども、用兵に當つては手を見せぬ所ありとして、利己的なる人心に卽して詭道卽ち無の兵法を說いた）朱子社倉法を檢しても、その施設が極めて現實的に考慮せられてゐて、人心に切實、事情に適應せること驚くべきものがある。斯樣にして朱子は空虛（語類一七の九頁によれば當時の思想としては老・佛を指す）に溺れることを避けんとした。併し同時に本性の存在、それが宇宙の根本實在として易ふべからざるものなりといふ考は、人道の實現に對する信念を確立せしめるから、各人は堯舜も亦人たるを思ひ、自ら靖んじて向上の步をつづけ得るのである。敎育の如きも外部から强制されたものでなく、內奧の要求に從ふこととなる（後述參照）朱子生涯の希望、社倉法の場合について言へば人心及び事物の現實性を指導する理念、卽ち王道實現への信賴が此處にあつた。斯樣にして朱子は功利（同上語類によれば申・韓を指す）に流れることを避けんとした。朱子によれば空虛に溺れず、功利に流れぬことが大學篇の根本思想である（文集七六大學章句序、大學或問五頁、同一〇頁、玉山講義參照）故に「性を論じて氣を論ぜざれば備はらず、氣を論じて性を論ぜざれば明ならず」（和版二程全書七遺書二頁）といふ程子の語の意義が認められる。性を論じて氣を論ぜねば、現實を解

くに足らぬし、氣を論じて性を論ぜねば、人間は方向を失つて闇に迷ふことになるであらう。この際大切なことは性の內容が家・國を基礎とする仁義の德となつてゐることと關聯して、特に人性は善なりといはれることの必要なる所以である。朱子は知言の著者胡五峯が、性について「善以て之を言ふに足らず」と言へるを批評して「知言固り性を以て不善となすにあらず……蓋し其の高遠を極めて以て性を言はんと欲して、名言の失反つて性を搖蕩・恣睢・駁雜・不純の地に陷るを知らざるなり」(文集四六答胡伯逢書、又同七三胡氏知言疑義參照)と言つた。其の高遠を極めて性を言ふ者は、この場合には普遍性・包括性尊重の傾向から性を以て善惡を超えたものとするが故に、人の世の倫理的秩序と無關係なものとなり、その爲現實の場に於ては却つて耽溺の醜に墮するといふ結果になることがあるから、寧ろ端的に性は善なりといふに若かずと朱子は考へてゐた(この事は陽明亞流の思想傾向を豫言したやうな結果になつた。一般に陸王學の思想は胡五峯等湖南學の思想と相似の點を持つてゐる)前述の如く性は心の本體であり、理であり、善であり、其の內容は仁義によつて代表される家・國の道である。併し心そのままは理でも善でもない。朱子はこの見地から靈活なる心に功夫をつけて性を論ずるを悅ばざる陸學(語類一二四の七頁等)や性を說いてもそれを心と同じく作用と見るといふ禪學(語類五七の一〇頁、同六二の二〇頁)と截然異るものと考へた。かくして所當然の理卽ち人道は性に本づくから安排を要せず、自ら已むべからざるものであると共に、又現實を超え之を指導するものと考へられるから、道は決して單なる事實と混同することは出來ない(この方面の思想を最もよく發揮したのは、宋では朱の門人で力を極めて陸學をうつた陳北溪、明では王學に先つて勢力を有した薛敬軒である。前者が陸學に對蹠的であつたやうに、王學は後者に對蹠的であつて、その間に思想の葛藤が釀し出されたことになる)朱子は先

輩楊龜山が、目・耳を物とし、視・聽を則としたのに滿足せず、視聽は依然として物であり、其の視の明、其の聽の聰にして始めて法則となり得ると考へた（語類六二の二一頁、文集四八答呂子約書等）但しこれは人の天性・法則が決して形色の間を離れて存在するといふことではない（文集四二答吳晦叔書）朱子の中庸或問は如上の考を極めて明確詳細に述べてゐる。家と國との道は遂に此處に到達する。朱子學の嚴肅なる立場はかかる考の上に立つてゐる（淸の戴東原の孟子字義疏證等によつて代表される宋學反對派の攻擊は結極この邊に歸するものと考へてよい）朱子は婺學事功派に對する辨難攻擊に於て、敢て漢唐の實力本位の俗論に心を奪はるる事なく、王霸義利の區別を論じた（文集三六答陳同甫書）（但し、朱子は決して心を民產に用うることの無意義なるを主張したのではない。寧ろその極めて大切なる所以を知つてゐたので、その方法の最も事宜を得、その動機の必ず仁愛の精神に在るべきことを注意した——文集二五答張敬夫書）又朱子は資治通鑑綱目を著し司馬溫公の資治通鑑編年の成文に據り、史實について褒貶を加へたが、功業の實を本とする見聞の說に蔽はるることなく、私慾を斥けて動機の純粹を重んじ、大義によつて斷を下した（この事に關し最も朱子の精神を得たものは淺見絅齋の靖獻遺言講義上に見える說であらうか）朱子は同じく理によつて時事を論じ國家の士氣を鼓舞した。君臣・父子の大倫は人心の深處に根ざすものなるを以て忠孝の誠を盡すことの眞に已み難き所以を敎へ、この上から極力國論の歸趨を圖らんとした（文集七五戊午讜議序、語類一三三の一三頁）此處に成敗・利鈍を以ては動かし難い態度が出來て、鬼谷子などに見えるやうに利害に因つて人心を釣り、其の際に乘ずる權謀術數の手段の用いらるべき餘地は無くなる。朱子の思想は一貫して家と國とを基とせる人倫の上に立つてゐた。

三

人は如何にして其の性の固有する所、職分の當に爲すべき所を知つてその力を盡すことが出來るか。この問題に答へ得るものは學の外には無い。朱子の著述儀禮經傳通解には、臣禮と共に學制・學儀を擧げ、古禮に此の部分に關する成篇無きは何れも重大なる缺陷なりとして之を補つてゐる。學問に對する朱子の異常なる熱意はその一生を貫いて變らなかつた。

扨て、朱子の考へた學は二方面から考察される。朱子は大學の格物・致知を解して物に卽いてその理を窮め、貫通の域に至れば物我共に明なる意にとつてゐる（大學補傳）格物は理の窮明が物について行はれ、所謂「實に行いてかの地頭に到る」（語類一五の八頁）ことを要する。反覆體驗（語類一〇の五頁）深く事理に透徹することを要する。朱子が如何に討議・研究の精神と是非に對する明確なる認識とを尊重したか、次の語が之を語る「某是れ人をして步々相循ひ都て來つてこの圈套に入らしむるを要せず、只是れ人をして是非を分別して明白ならしむるを要す。是なるものはかれの是に還し、不是なるものはかれの不是に還す、大家各自に力を着け、各自にささへもち……各行いて大路頭に到り、自ら箇の歸一の處あり。是れ乃ち不同の同、乃ち眞同たる所以なり。若し乃ち依阿・鶻突・委曲・包含是非を別たず、打して一片と成すを要せば定めて是れ不可なり」（語類一二〇の一八頁）朱子は劇論を愛した（文集六一答德久書等）書を讀んでは酷吏の法を用うるが如く深刻なることを推奬してゐる（語類一〇の三頁）一體、表面滅亡したやうに見える先秦論理思想の趣は陰に支那精神の裏に傳つてゐるやうに思はれる。これは支那の性格を理解

する上から大切な事柄であるが、このおもむきが朱子に感ぜられなくはない（ただ朱子は書を以て書を觀、物を以て物を觀、先づ己が見を立つべからず――語類一一の五頁――と言ひ事に隨つて討論するやう注意してゐる――語類一八の四頁――から、かかる點却つて清朝考據學とも相通ずる一面を生じ得たのかも知れない）これが朱子學の窮理である。然らば窮理が物に卽いて行はれるのは何故であらうか。一般に理と言へば捉摸すべき所が無く、物時あつて離るるけれども、物と言へば理自ら在つて離るることを得ないからと考へられる（語類一五の八頁）事物のうち家・國の理が最もよく表現されてゐるものは禮に若くはない。好んで理を說いた朱子も、後には理と說くよりも禮と說く方が精微縝密であると考へるやうになつた（文集四三與林擇之書）禮は卽ち理であるが、理といへば形迹の言ふべき無きに比し、禮となせば品節文章があつて見易い（文集六〇答曹擇之書）朱子は其の晩年風力勁急の下に在つたにも拘らず門人達の協力を求めて支那精神の表現ともいふべき諸資料の綜合會萃によつて、禮書――儀禮經傳通解を編輯したが（文集一四乞修三禮劄子、同二九與黃直卿書及び朱在跋文等參照。この書の續編は門人黃勉齋の手に成つた。黃文肅公文集五與李敬司子直書、同一六復李貫之兵部書等にて當時の樣子が分る。又正編の本邦刻本はよく知られてゐるけれども、續編の精刻本が新發田藩から出てゐることは、間もなく版木燒失せしため知る人が少いからここに附記する）此の事業の意義は格物による窮理の大規模なる試みであつた所に存する（淸の秦惠田の五禮通考も序文によれば朱子の遺意を繼ぐもののやうである）ここに留意を要するは、物に卽いて物を窮めるのでなく、物に卽いて理を窮めるといふことである。觀心の功夫を排する朱子の立場もここから來るやうに察せられる。朱子が物我一理を信じ、理の內在としての性を說いた點から言へば、理を包み之を管攝する心を觀るといふことは許されさうであるけれども

朱子によれば、元來心は之を觀んとすればこの心を以て又一心を觀ることとなり、觀得るものは對象となれる心、卽ち當時の言葉でいへば所謂知覺に止る。その意味に於てなほ一の物に過ぎない（陽明門下に於て强く現成良知思想に反對し、師說の行過ぎを矯正せんとした聶雙江が、聞見を以て學となすのも、知覺を以て聞見に易へんとするのも均しく外であつて內ではないと言つて――雙江文集四送王惟中歸州――知覺といはれたものの解釋に於て朱子に近いのは興味ある思想史上の經緯を成す。つまり、宋學を洗つた明學の波の中から宋學を以て又明學を洗ふ一派が出て更に明末思想界の問題が開展する）かくて二心・兩物相待て相舍かざるに至る（文集六七觀心說、又前記釋氏論）から險途に陷らざるを得ない。故に寧ろ心を以て物を觀、物（對象となれる心も含め）に卽いてその理を窮めるに若かない。朱子によれば、此の心を識察するのは致知の切近なるものといふことはいひ得るけれども、所謂心を識るといふことはただ此の心の精靈・知覺を識らんと欲するのではなくして、乃ち此の心の義理・精微を識らんと欲するに過ぎない（文集五二答姜叔權書、又語類一八の三四頁參照）はずである。そこに始めて物を超え、之を支配する高い境地が生ずる。かかる方法によつて物の理に格ることは、そのまま心知至る所以である。物格り知至るによつて道德の境地が活きて來る。所謂鄉曲の常人婦女の檢押たるを免れて自在となる（文集六〇答曹無疑書參照）孟子の言葉を用うれば「之を左右に取りて其の原に逢ふ」所の「自得」の域に至る。朱子大學補傳の貫通とはこの謂に外ならない。以上朱子の考へた學の一面。

次に、人性として內在せる理の愛護のため朱子は涵養の功夫を說いてゐる。蓋し心を觀ることは困難であるが、心の靈を知らずして之を存する事なければ、昏味雜擾して以て衆理の妙を窮め得ぬから、此の功夫が必要とされる（大

學或問二〇頁）この功夫は程門の楊亀山より李延平に到る相傳の靜の思想、更に溯れば周濂溪より發する主靜思想の流を汲むものと考へてよい。朱子は謝上蔡・胡五峯・張南軒の間に傳つた動的なる功夫（これは當時の臨濟禪や後の陽明の學と一脈相通ずる所があるやうに想像される。大慧宗杲は靜坐を排した。例へば大慧書には靜坐を執つて佳なりとなす事の滯泥なる旨を言つてゐる――答李參政別紙。陽明の定說は滁州時代に於ける靜坐の功夫を捨てゐる）の非を辨じ極力靜の功夫を主張した。若し動的功夫に傾いて平日涵養の功夫を缺却すれば「其の日用の意趣常に動に偏して復た深潛純一の味無し、而してその之を言語事爲の間に發する、また常に躁迫浮露、古聖賢の氣象無し」（文集六七已發未發說、又同六四與湖南諸公論中和第一書參照）といふことになるを免れない。そもそも動的事象の奥に靜なるものを考へることは、宋代文化の精神、一歩を進めて言はば支那民族の根本性格に觸れる點があるのではなからうか。支那民族の性格は老莊の言葉を用うれば自然を主とするが、自然は卽ち靜である。無論この自然この靜も結局大いなる生命であつて、その意味で動といへる。その意味で動なればこそ靜の極から對立を絶した作用が起る。無爲にして爲さざるなしとはこの謂である。思想界に於ても老莊は固り、兵家・法家の如く活世間に住するものも、或は人倫を說く儒家さへも夙に其の風が見え、實はここに支那精神文化最奥の問題があり、朱子學の精神も特に此の圈內に包まれる（先に臨濟禪や陽明學は動的としたけれども、それは老莊・曹洞禪・朱子學との比較の上であつて、これ等も廣義の靜的思想と見做され得ないことはない）併し朱子學に於ける靜の功夫の意義は自らなる經過によつて、心の本體であり宇宙の根本存在である家・國の理に沈潛してゆく所にあつた。かくして始めて、儒敎の傳統からいふ純粹客觀の立場（中庸、周濂溪通書第一二、周易艮卦程傳等參照）卽ち易の所謂中正なる立場が現はれる。これを融

釋の境地といふ。靜の功夫は右の境地を希ひ、根元的なるものの力に依つて此處に至らうとする精神なりと解されやう。朱子が周濂溪の畫像に贊して風月無邊庭草交翠（文集八五）と言ひ、李延平を祭つて氷壺秋月（同八七）と言つたのはこの二人の靜の思想家が家と國との態を成す人の世を超越せることを意味したのではなく、眞に融釋の風格があつたことを稱へたものであつた。哲學者張横渠の學が程朱以來「明睿照す所に非ずして考察ここに至る」（二程全書六三程伊川答張横渠書）「彊探力取の意多くして涵泳完養の功少し」（朱子文集六七定性說）とせられたのは此の功夫を缺ぐ故であらう。併しながら靜の功夫は一途に靜を求めることなれば、却つて心亦靜を得ること能はざるに至る。是の故に朱子は靜に換へるに敬を以てする。ただ朱子が靜を以て本となすことに於ては變りはなく、特に靜に偏することを避けたにとどまる（文集三二答張欽夫書、語類九の三頁、又夏弘甫述朱質疑五參照）然らば敬は如何なる性質と手段を有するか。それは心の全體性を尊重する所の功夫である。本體としての性、並に作用としての情、何れにも偏せざる功夫であり、本體として嚴存し、作用として發露するものについて肅み愼むの謂である。敬は程子に據つて主一無適といはれ、尹和靖によつて其の心收斂一物を容れずといはれるがその最も重要なることは動靜の時に際し、人倫を內に含む全體としての心を活す積極性にある（語類一二の二二頁等參照）かかる意味の積極性をよく表はすのは程子門人の中に於いて英發を稱せられた謝上蔡の常惺惺（常に心を喚び醒す）の法であらう（語類一七の四頁に常惺惺の法について儒釋の相違が辨ぜられてゐる。儒教の場合には畢竟性命道理、卽ち人倫の喚醒を意味する。淺見絅齋が白鹿洞書院揭示師說に言つてゐるやうに眼前日用の人倫の實なりが敬の場であらう。故に同じく語類一二の一八頁によれば、義なき敬を死敬といふ。又文集四〇答何叔京書參照）朱子が上蔡の思想傾向に對しては必ずしも滿

足しなかつたにも拘らず、敬を說いては後年迄常惺惺の字を使用したのは敬の本質が斯樣であつた爲と思はれる。敬の功失はかく積極的な心の培養を目差すものであるが、性と情とは前にもいへるやうに渾一なるものであつて、之を包括し主宰する心は靈活神妙なる生命であるから、之を活し其の面目を保つ爲にはなまじいに一指を下し難い所がある（敬の功夫が心の生命の功夫なる點から考へれば、これは湖南學又は陸王學の動的功夫と相通ずる一脈を持つてゐて、此の方面からこれ等諸學の共通性質を把へることも出來る。朱子によれば、心を生道とする考は縱へ湖南の偏見に陷る懼ありとはいへ、遂に廢すべからざるものであつた——語類一二一の二二頁、王陽明が敬を蛇足とした——傳習錄上末尾——のはあの立場からは改めて敬を說く必要が無いといふまでのことであつて、敬を否定したのとは稍意味が違ふ）心の生命は急迫にあらず、擬議にあらず、功夫を超えた功夫によつて育てるのでなければ死するを免れない。孟子は箇中の消息を知つてゐたから、養氣の功夫を說いて「忘るる勿れ、助長する勿れ」（公孫丑上）と言つたものとみえる（莊子の應帝王篇に七竅鑿たれて渾沌死することを語つてあるのも同樣な事情によるのではあるけれども、朱子の考へた心は莊子の渾沌よりも一層積極性を有し且つ人倫と相離れぬものと考へねばならない）朱子はかかる邊を顧慮し、程伊川によつて整齊嚴肅といふ手段を選んだ（張南軒の主一箴に慊らずして朱子が敬齋箴——文集八五——を作つたのもこの爲であつたといふ）「又況んや心慮荒忽、未だ必ずしも眞に能く存し得ざるをや。程子敬を言ふ必ず整齊嚴肅を以て……先となす……此の如きは乃ち是れ至論——前記與林擇之書）「未發の前尋ねもとむべからず、已發の際安排すべからず。ただ平日莊敬涵養の功至つて欲の僞以て之を亂す無ければ、則ち其の未發や鏡明水止にして其の發するや節に中らざるなし」（前記論中和書）かくてただ虛靜といひ存心といふよりも、著しく親切なる

功夫が得られた。整齊嚴肅なれば心則ち主あつて自ら存する。而して整齊嚴肅なれば、其の心收斂、常惺惺等の數條通貫せざるなしと考へられるから（語類一二〇の七頁、文集四七答呂子約書等）整齊嚴肅が最も重要なる敬の門戸であると見てよい。併し、敬は元來心の生命を活す功夫であつた。この功夫がかく外形の功夫として說かれるに至つたのはやや奇異に感ぜられる。整齊嚴肅は直ちに敬ではなく敬をなす所以――語類一七の三頁――所謂筌蹄であつてこの意味から言へば常惺惺の方が寧ろ敬の本質に近いのであるが、朱子はこの事について「根本枝葉もと是れ一貫、身心內外もと間隔なし、今專らこれを內に存してその外を略すといはば、是れ自ら間隔をなして其の心流行の全態常にその半を得てその半を失ふ」（文集四〇答何叔京書）と述べてゐる。かかる考が禮の精神と一致することは容易に想到される。（ここから言へば、敬の思想は象山・陽明の心の功夫とその入手の所を異にし、確に伊川思想の面目を維持するものとみられるが實は禮の不思議な力を信じ、外部的完成によつて內部的完成を企圖する支那本來の思想から來たものとすべきであらう）朱子によれば、當時の心の功夫は一箇の心を以て又一箇の心を察識把捉せんとして、外面未だ一事あらざる時裏面已に三頭兩緒あり。着意・按排を免れず紛擾急迫の中に流れる傾向を持つてゐた（文集三一答張敬夫書、又同七答呂子約書、前記釋氏論參照）禮による敬は之と違ふ。卽ち禮による敬こそ寧ろ忘れず、助長せず、眞の意味で自らなる所があつて、ここに心は對立の狀態から脫却しその本性たる家・國を本とする人倫の立場を靈活なる全體性のままに培養する事が出來る。「ただ其れ之を操る久うして且つ熟し自然に義理に安んじて妄動せざれば則ち所謂寂然たるもの當に察識を待たずして自ら呈露す……然るに心は一のみ、所謂操存するもの亦豈此の一物を以て彼の一物を操り、鬪ふ者の相捽つて相舍かざるが如くならんや……主一無適、禮に非れば動かざれば、則ち

中主あつて心自ら存するのみ」（同上答呂子約書）といふのはこの意味である。（顏子の樂は平淡であつて、曾點の樂は已に勞攘し了る（語類三一の二〇）といふ朱子の言葉がある。これは普通の考と逆のやうに見える。即ち陋巷に在つて禮の功夫をなす顏子の樂を以て、沂に浴し舞雩に風し詠じて歸らんと言つた曾點に比し平淡なりといふは分りにくい。併しながら禮による人倫の立場こそ人間本來の正しい生方であつて、實は眞に淡白な立場であるとするのが儒教の旨を保つ程子以來の傳統であつた。されば胡致堂の如きも死生の際に於て辭氣亂れず安靜にして逝いた邵康節など諸人の例をあげ、曾子易簀の正に及ばずとしてゐる――官版崇正辨二の五頁――曾子は一途に禮を守つて斃れ、死生を問題の外に置いのであるから。朱子の思想はかかる精神の流れを引いてゐる）以上の如きは朱子の考へた學の他の一面。

斯樣にして朱子學は居敬・窮理の二端によつて完成する。故に大學或問に「人の學を爲す所以は心と理とのみ」とある（又文集六四答或人書參照）

四

朱子は以上陳べたやうにして居敬と窮理とを以て學問の二端を說いた。そのうち敬の功夫は古の小學の教育方針と性質を同じうする所があるとせられる。朱子は小學の鍛錬を主とする基本教育の上に、大學の知識を主とする教育を施して始めて「習知と長じ化心と成つて扞格勝へざるの患無く」（文集七六題小學）して學問が純熟することを語つてゐる（語類七、諸條等參照）但しこれは何れも主とする方から言つたのであつて、決して本末を轉倒することは許

されないが、小學にも知的な所があり、大學にも鍛錬の方面がある。否寧ろ、小學に於て根基已に深厚なるにより、大學に到りて上面について些の精彩を點化し出す（語類七の二頁）に過ぎぬ。かくて大學教育は小學教育の培根に對し達支といへる（小學題辭）と朱子は考へた（又大學或問一頁、語類八の三頁等參照）淺見絅齋が大學はただ小學の大に精しくなつた分で何もかはつたことはないと言つたのは（小學大意講義）此の意をよく見てゐる。居敬・窮理といふ學問の二端は古の小・大學の教育方針を襲ひ、その精神を復活せしめんとして案出され、特に居敬は當時の小學教育の缺陷を補ふものとされた（精しく言へば、前述の如く小・大學何れも主とする所はあつても、鍛錬を必要とすることに於ては變りはないから、敬は學の始終を成すものとして小・大學共に之による——大學或問一頁）朱子はこの精神の教本として大學は已に傳來するが（即ち禮記大學篇）小學の書は今その全書見るべからずとして、門人劉子澄と共に小學の一書を蒐輯した。我々は既にのべた大學篇の根本思想の解釋によつて朱子大學教育の精神を知ることが出來る。又小學書の編纂方法、殊に立教・明倫・敬身・稽古とあるその篇目によつて小學教育の精神を知ることが出來る。この外朱子學の精神を見るため逸してはならぬものは近思錄と白鹿洞書院掲示とであらう。小學篇目と共に特に近思錄篇目の重要性に着眼して深く朱子學の組織とその精神とを把握せんとしたことは我國崎門學派の功績であつた（就中、淺見絅齋の近思錄講義、若林强齋の近思錄十四目師說の如きその最も優れたもの）白鹿洞書院掲示によれば、第一に學問は人倫に本づいて義理を講明し、以てその身を修め、然る後推して以て人に及ぼすに在り、記覽をつとめ詞章を爲りて聲名を釣り利祿を取るのではない。第二にかかる學問は苟もその理の當然を知つて、その身に責むるに必然を以てすればよいのであつて、他人が規矩・禁防の具を設けることを待つて持循する所あるのではない。故

に朱子はことさらに古來慣用の「學規」といふ名を避けて「揭示」としたといふ（以上跋文參照）老釋思想の只中（廬山）に孟子の所謂三代之を共にした人倫を明にする所以の學を起さんとして建立された白鹿洞書院の揭示はよく朱子教學の精神を示してゐる（文集一六繳納南康軍任滿合奏稟事件狀同一三辛丑延和奏劄七等參照）

最後に一言附け加へれば、朱子の佛教批評は當時の思想界に於て相當有力に作用した形迹がある。淸の陳淸瀾は朱子出でて佛學衰へた事實を指摘してゐる（官版學蔀通辯終編下八頁）これは大慧のやうな力ある大立物がゐなくなり其の他諸種の事情から思想轉回の機が熟した所に朱子が英偉明峻の資（その友、呂東萊の語を用うれば）を以て學界に現はれ長い傳統を有する民族存在の根基により、その新なる自覺を振起したからであらう。後來朱子及び他の宋學者の議論に對する佛教の側からの反駁も出てゐる。金の李屛山の鳴道集說などその一例である（この書は我が延寶二年中野是誰によつて五卷二冊本として飜刻された）屛山の反駁は宋儒の攻擊が小乘教相に向けられたもので、嚴圓極の宗、理事無礙の旨を深究してゐないといふのであつたが果して如何なものであらうか。本文は朱子の精神を明にするのが主であるから、この問題に深入りしない。前記觀心說・釋氏論、卷一七の一一頁、同卷一二六の諸條等をみれば朱子の佛教觀及びその讀んだ佛典の種類も略分る。篤志家の研究を希望する。

（昭和一八・二・二七）